

commencer と se mettre の意味的差異

谷 口 千賀子

1. は じ め に

事行の展開は、大きく、事行の開始、展開中、終了、の3つの段階で捉えることができ⁽¹⁾、その表現手段には、commencer (à+inf.), se mettre (à+inf.), continuer (à ou de+inf.), finir (de+inf.), cesser (de+inf.) といった動詞や dès lors, à partir de ce jour-là, longtemps, il y a un moment que, il n'y a qu'une minute que といった状況補語⁽²⁾ など、さまざまな要素がなりうる。その中で、commencer と se mettre は事行の開始を表す動詞としてほとんどの研究書等に取り上げられながらも、同じ意味を持つ動詞としてしか扱われていないが、両者の間には何らかの意味的差異があるように思われる。これまでの研究では、FRANCKEL(1989)(以下 F)に、この2つの動詞の差異を明らかにしようとする試みが見られるが、いくつか問題点が残されているようである。

本稿の目的は、commencer と se mettre の意味的差異をより明確にすることである。以下、まずFの記述を紹介し(第2章)、インフォーマント調査⁽³⁾から得られたデータをもとに、Fに修正を加える(第3章)、といった手順で論を進める。

2. Fによる記述

2. 1 se mettre à P⁽⁴⁾

ここでは、se mettre について、F の記述の概略を紹介する。

まず, se mettre à P は書き言葉において, soudain, tout à coup, brusquement などの副詞類と結び付きやすく, 次のような場合, commencer à⁽⁵⁾ を用いるよりよい (p. 142)。

1) Soudain, le vent se mit à souffler.

また, se mettre à は状態動詞と結び付くような場合, 現在形の肯定文において大きな制約を受ける (p. 142)。

2) *Je me mets à en avoir marre.

3) *Je me mets à être fatigué.

4) *Tu te mets à m'énerver⁽⁶⁾.

5) *Ça se met à bien faire.

ただし, quand や si を用いて発話時点と切り離したり, je sens que, voilà que などのマーカーを先行させて発話者と事行との間に隔たりを生じさせれば, 上にあげたような文の一部は全く自然な文となる (p. 142)。

6) Quand tu te mets à être désagréable comme ça, toute discussion devient impossible.

7) Je sens que je me mets à être désagréable, il vaut mieux que je m'arrête.

これらの制約から, se mettre à P は前もって何ら想定されていない P の, いきなりの出現を示すという特徴を持つという仮定を立てることができる。時間軸上において, 事行が開始される時点のみを問題にしているのである。se mettre à P が brusquement や soudain などの副詞類と結び付きやすいのも, これらが, ある事行を何もないところから時間軸上に位置付けるのに大きな役割を果たしているからである (p. 143)。2)～5) の場合, P はいきなり時間軸上に現れるのではなく, pas encore P との関連で想起されるのだから, P の最初の出現時点だけを示す se mettre à では容認不可能なのである (pp. 145-146)。

また, se mettre à P は否定文に関しても大きな制約を受ける (p. 144)。

8) Je ne me suis pas mis à manger.

は, Il est faux que je me suis mis à manger としか解釈されないという。

2. 2 commencer à P

同様に, commencer について, F の記述の概略を紹介する。

se mettre à P とは反対に, commencer à P は P をあらかじめ想定した上で P の開始を表す。つまり, commencer à P は P の実現が予期されていることを含意している。それゆえ, 常に commencer à P は pas encore P と対比させて考えられ, pas encore P から commencer à P への過程を想定することができるのである (pp. 144-145)。commencer à P に関するこのような仮定から, 状態動詞をとまなう場合について, commencer à を用いると全く容認可能であることが説明できる。

9) Je commence à en avoir marre.

se mettre à を用いると前触れもなく <en avoir marre> という状態におちいると解釈されるため容認され難いこのような文も, commencer à の場合, <pas (encore) vraiment marre> から <vraiment marre> へと移行した時点を示すと解釈されるため, 何の問題もなく受け入れられる (pp. 145-146)。

さらに, commencer à P の場合, à la fin を後置したり, 強調の副詞を付加できることから, <pas encore P> から <commencer à P>⁽⁹⁾ への過程を想定できる (p. 146)。

10) Je commence à en avoir marre, à la fin!

11) Ça commence à m'énerver sérieusement.

また, <pas encore P> と <commencer à P> との境界線は具体的なものではなく, 観念的なものであってははっきりしないことも, commencer à のほうが se mettre à より穏やかな開始を感じさせる一因である (p. 147)。

以上のように, F は commencer と se mettre の本質的な違いを, 予見の有無に基づいて説明しようとしているが, フランス語の実態をよく観察すると, それでは説明できない場合も見られる。以下, 次章では, F による 2 動詞

の捉え方の問題点を検討しつつ、より明確に2動詞の差異を説明できる概念を探っていきたい。

3. Fの問題点と新たな仮説の提示

3. 1 Fの問題点

まずFにおいての一番の問題点は、予見という概念を問題にしてはいるものの、何（誰）による予見なのか言明されていないという点である。一人称が動作主の場合には、当然話者による予見なのであろうが、それ以外の人称が動作主のときには動作主の予見なのか、話者による予見なのかははっきりしない。しかし、一般に話者による予見と考えてよいだろう。

さらに上で見たように、Fは予見の有無によって commencer と se mettre の使い分けが生じると説明しているが、se mettre を用いるとき、P に関して何らかもって想定することがないとすれば、未来の事行を se mettre を用いて表すことはできないはずであるし、また何らかの目的に向かって開始される事行を se mettre で表すことは難しいはずである。しかし、いずれの場合にも se mettre は何の問題もなく容認される。

12) Si je ne lui donne pas ces bonbons, il va se mettre à pleurer.

13) Pour acheter une voiture, il s'est mis à travailler encore plus.

brusquement や tout à coup などの状況表現に関しても F は、se mettre と結び付きやすいことを理由に se mettre が突発的な開始を表現すると説明しようとしているが、commencer と問題なく共起するようである⁽⁸⁾。

14) Soudain, le vent commence à souffler.

これらの状況表現が結び付きやすいことを理由にして se mettre の突発性を説明することはできないように思われる。

また、F は se mettre の否定文に関して特別な解釈を必要とするために、se mettre の否定文自体存在し難いように述べているが、インフォーマント調査によると、commencer の否定文ほどではないにしても <pas encore P> の

解釈が可能であるという結果を得た。

15) ?Je ne me suis pas encore mis à manger.

ただし, je ne me suis pas mis à manger は15)より容認度が低く, commencer の否定文の場合とは違って, 依然として何らかの制約があるように思われる。

3. 2 仮説: non P⁽⁹⁾ と P との境界線の明確さ

このように, commencer と se mettre を予見の有無によって区別するところから, 3. 1 でも見たような問題点が生じる。13) では commencer よりも se mettreの方がよく, さらに12)では commencerの使用が不可能であると答えるインフォーマントもいた。これらの例文ではいずれも話者の予見可能な事行として捉えられるはずであるのに se mettreの方が好まれる傾向にあるのだ。

そもそも se mettre という動詞は *TRÉSOR de la LANGUE FRANÇAISE* や *ROBERT* などでは〈venir occuper (un lieu, un endroit, une place)〉という語義が認められているが, 原義は〈ある場所に身を置く〉であろう。そこから, 〈ある事行に身を移す〉を経て〈ある事行を開始する〉という意味になると考えられる。つまり, se mettre を用いるときには non P から P へ移行が明確になされているのである。これに反して commencer はというと, non P から P への移行がはっきりしていようとしていまいと構わないのである。commencer と se mettre の意味的差異は, 予見の有無というよりはむしろ, non P から P への移行の仕方にあるのだ。例えば今まで頻繁に論じられてきた状態動詞をともしなう場合についても次の様に説明することができる。

16_a) Grâce à son professeur, qui est excellent, il commence à pouvoir nager.

16_b) *Grâce à son professeur, qui est excellent, il se met à pouvoir nager.

この場合, non P つまり〈泳ぐことができない状態〉から P〈泳ぐことができる状態〉への境界線をはっきり引くことは一般に不可能である。それゆえ,

non P から P への移行が明確でないために pouvoir が se mettre と共起することが難しいと考えられる。

17_a) L'année dernière j'ai rencontré une jolie Française et j'ai commencé à vouloir étudier le français.

17_b) L'année dernière j'ai rencontré une jolie Française et je me suis mis à vouloir étudier le français.

17_b) では vouloir が se mettre と十分共起しうるようである。vouloir の場合、概念のレベルでは pouvoir と違って、＜望んでいない状態＞から＜望んでいる状態＞への移行が明確であることがある。17) はまさしくその例であって、jolie Française に会った瞬間フランス語を学びたいと思った、という気持ちの切り変わりをより明確に表すために se mettre を用いることがありうるのであろう。このように、non P から P への移行の明確さを表すために se mettre が使用される。

さらに、先に述べた12)や13)の例についても同様の解釈が成り立つ。12)ではキャンディーをあげるかあげないかによって il の状態が明らかに変化してしまうのである。その明確な変化を表現するためには commencer より se mettre の方が適しているという判断は納得のいくものであろう。13)においても、車を買うと決めた瞬間から一層働き始めた、という以前の状態との対比を明確にする効果が se mettre を用いたときに現れる。

このように、se mettre の使用例として、話者、あるいは動作主による意識的な変化を表す場合を取り上げてきたが、この考え方は、非人称表現や人以外のものが主語として立つ場合にも有効である。

18_a) Dehors, il a commencé à pleuvoir.

18_b) Dehors, il s'est mis à pleuvoir. (LAPEYRE⁽⁶⁾, p. 75)

19_a) La chambre commençait à devenir sombre. (TOUSSAINT⁽⁶⁾, p. 55)

19_b) *La chambre se mettait à devenir sombre.

20_a) ?Le téléphone a commencé à sonner dans la chambre.

20.) Le téléphone s'est mis à sonner dans la chambre. (LAPEYRE, p. 32)

18) の場合, commencer も se mettre も問題なく使われる。＜雨が降っていない状態＞と＜雨が降り始めた状態＞の間の変化をより際立たせるためには b が適しているが, 単に事行の 始まりを表すだけであれば a の表現で十分である⁹⁴。19) と 20) は対称的な使用例である。19) の場合, ＜暗くならない状態＞と＜暗くなる状態＞の間にはっきりとした境界線を設けることは一般に不可能である。それゆえ se mettre との共起は難しいのであるが, それとは反対に, 20) の場合, ＜電話が鳴っていない状態＞と＜鳴っている状態＞との間には明らかに変化がある。そのために, commencer を用いるよりは se mettre を用いて, 誰の目にも明らかな変化を表現しているのである。

否定文の場合にも同様にして説明ができるのではないだろうか。commencer の否定文も se mettre の否定文も 3. 1 で見たように, 十分に存在しうるし, 特別な解釈も必要としないはずである。F が述べている se mettre を否定にした場合の il est faux que... という解釈は, 文脈によっては, commencer を用いる場合に対しても当てはまるはずである。ただし, se mettre は non P から P への明らかな変化を示すために用いられるので, その否定文においては単に事行の開始を否定しているだけでなく, 何らかの変化の到来をも予測していると考えられる。se mettre の否定文は単に ne pas で否定するだけでなく, pas encore を用いたほうが容認度が高いという事実 (例文15) は, このことによって説明できる。

4. お わ り に

このように, commencer と se mettre の意味的差異を, 予見の有無ではなく, non P から P へ移行の明確さの程度に注目しつつ検討してみた。状態動詞がすべて se mettre と共起しないわけではなく, non P と P の境界線が明確であるかどうかによって動詞の使用が決定されるのである。

日本語の場合、事行の開始を表す表現手段として「～出す」と「～始める」があげられるだろう。森田（1977）はこの2つの差異を次の様に示している。

「～出す」は「考え出す、思い出す」のように“事柄の発生、形成”の意のある点、「～始める」と異なる。「～出す」は無の状態、現れていない状態のものがおのずと顕在化し、動作・状態の変化として形をなすという気分が強い。“開始”よりは“新たな事態の成立”の意識が強い。だから、人間行為に使われても、意志性がない。

この「～出す」と「～始める」の違いは、一見、これまで見てきた *commencer* と *se mettre* の差に通じるものがあるように思われる。「～出す」のほうは無の状態から変化を生じさせるという意味を持つ点、*se mettre* と重なる部分もみられようが、*se mettre* は日本語の「～出す」のように意志性がないと言えるだろうか。日本語では「そろそろ勉強し出そう」などとは言わないが、フランス語では *je* を主語に立てても十分通用する。*se mettre* は、複数の可能性の中から開始しようとする行為を選び取って自ら行動を起こすといった操作がなされ、それゆえ表面上には現れないにしても、何らかの意志の働きが存在する。

この意志という概念は1人称に用いられる場合には何の問題もないのだが、2人称や3人称、特に人以外のものが行為主体である場合には、やや問題が生じやすい。しかし、*commencer* と *se mettre* の場合に限って言えば、まず non P と P との境界線をはっきりと意識することができるかどうかの問題なのであって、意志性といったことはその副産物にすぎない。

本稿で扱わなかった問題のひとつに時制がある。今回の調査に際してあるインフォーマントから、*pouvoir* をともなう場合（例文16）には *commencer* は現在形のほうが好ましいという指摘があった。ともなう動詞によって、*commencer* や *se mettre* の時制に制約が生じることも考えられる。この問題は稿を改めて検討する。

注

- (1) 事行の展開そのものを問題にしているので、その前後は考察から除く。
- (2) DUCHÁČEK, (1966)。
- (3) 高学歴のフランス人。(発話例によって3～5人)
- (4) Fは開始事行をPと表している。以下、必要に応じて筆者もこの表記を使用する。
- (5) Fは commencer à, se mettre à と表記しているので、2章ではその表記に従う。
- (6) Fでは例文4)と5)に用いられている動詞を状態動詞とみなしているが、これらの動詞は状態動詞には分類されないように思われる。
- (7) 「<pas encore vraiment P>から<vraiment P>」と解釈できよう。
- (8) ただし、Fに「書き言葉においては se mettre à が tout à coup, soudain, brusquement などの副詞類と結び付きやすく…」と示されているように、インフォーマント調査においても se mettre とともに用いると、書き言葉である、あるいは洗練された文になる、といった指摘を受けた。
- (9) <pas encore P> とも P 以外の事行とも解釈可能である。
- (10) LAPEYRE, P. (1987) : *La lenteur de l'avenir*, Édition J'ai lu.
- (11) TOUSSAINT, J. P. (1985) : *La salle de bain*, Les Éditions de Minuit.
- (12) インフォーマントによっては、se mettre を用いたほうがよりあらたまった表現であるという指摘をしているが、ここでは扱わない。

参 考 文 献

- DUCHÁČEK, O. (1966) : “Sur le problème de l'aspect et du caractère de l'action verbale en français”, *le français moderne*, 3, pp. 161-184.
- FRANCKEL, J.-J. (1989) : *Étude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Librairie Droz.
- IMBS, P. et al. (1971) : *TRÉSOR de la LANGUE FRANÇAISE*, CNRS.
- 森田良行 (1977) : 『基礎日本語1』, 角川書店.
- REY, A. (1985) : *Le Grand Robert de la Langue Française*, 2^e édition, Le Robert.